

我が国周辺水域資源評価等推進委託事業

「資源評価調査事業」資源動向調査（タチウオ）

吉見圭一郎・和田隆史

本事業の目的は、我が国周辺水域における主要魚種（TAC対象種、資源管理計画対象魚種など）の資源評価に必要な科学的データの収集と資源動向の的確な把握である。それらによって科学的根拠に基づいた提言を行い、もって資源管理の施策を推進する。

このうち、資源動向調査では、資源管理指針対象魚種、広域重要魚種、栽培対象魚種について、漁業と資源の現状、資源回復に関する管理施策、種苗放流による効果の知見を収集するために必要な調査を実施している。徳島県はタチウオを担当し、「平成24年度資源動向調査の中間報告（高知県高知市で実施）」と「平成24年度太平洋ブロックのタチウオ検討会（大分県豊後高田市で実施）」で報告した。ここにはその概要を示す。

1. 調査方法

（1）操業実態調査

漁業者、漁協への聴取により、徳島県におけるタチウオの操業実態を把握した。また、操業船日誌調査により、紀伊水道における小型底びき網漁船（以下、「小底漁船」という）の出漁状況、操業場所を把握した。

（2）資源動向調査

漁獲集計システムを導入している11漁協（北灘、徳島市、椿泊、阿部、志和岐、東由岐、日和佐町、牟岐東、牟岐町、鞆浦、宍喰）における2000～2012年の漁業種類別漁獲量と漁業種類別CPUEを算出した。

2. 調査結果

（1）操業実態調査

徳島県で水揚げされるタチウオは、延縄、小底、曳縄釣、定置網で漁獲される。一本釣、機船船曳網、旋網ではわずかに混獲される程度である。

また、徳島県海域の漁場を紀伊水道、太平洋、播磨灘の3つに分けた場合、タチウオの漁獲量の77%が紀伊水道、23%が太平洋側に位置する漁協で水揚げされている（図1-1）。播磨灘では、タチウオの漁獲実態はほぼない。なお、紀伊水道におけるタチウオの主要漁法は、延縄と小底である。徳島市漁協と椿泊漁協で水揚げされるタチウオの46%が延縄、54%が小底で漁獲される（図1-2）。小底によるタチウオの水揚げの71%が徳島市漁協、29%が椿泊漁協である。

紀伊水道における延縄漁業によるタチウオの主要漁期は1～4月で、大型個体を狙って紀伊水道及び紀伊水道外域（太平洋）へ出漁し、浮き延縄漁具を使って釣獲する。高鮮度を保つために氷蔵されたタチウオは、「釣り物」として小底の漁獲物とは別に扱われる。

小底漁業によるタチウオの漁期は4～10月で、ハモ、小型エビ類（アカエビ、トラエビ、サルエビなど）、クマエビ、イボダイ、マナガツオなどとともに、立ち網と複葉型オッターボードを組み合わせた漁具で漁獲される。漁獲物の主群は1～2歳で、氷蔵して持ち帰る。漁協へ水揚げされたタチウオは、サイズ選別後に出荷される。

（2）資源動向調査

紀伊水道における延縄と小底の漁獲実態を指標に、主要漁協の漁獲量からタチウオの資源水準・動向をみると、2000～2012年は低位・横ばい傾向と判断される。

延縄漁業の主たる水揚げ港は椿泊漁協で、漁獲は周年みられるが、1～4月の漁獲量がとくに多い。1～4月までの4カ月間に集中してタチウオが漁獲される理由は、相場の高い大型のタチウオを狙って延縄漁船が多く出漁するため、5～8月までの4カ月間はハモ漁に切り替えるのでタチウオの漁獲量は減少する。2008～2012年で比較すると、10.7トン/年・隻の漁獲がある。多獲期にあたる1～4月の4カ月間に7.3トン/隻、年間漁獲量の68%を漁獲している。2000～2012年の平均漁獲量は168トン/年であった（図2-1, 2-2, 2-3）。

小底の主たる水揚げ港は徳島市漁協、小松島漁協、和田島漁協、椿泊漁協で、漁獲は周年みられるが、8～10月の漁獲量が特に多い。5～7月にはハモやエビ類を狙うので、タチウオの漁獲量は比較的少ない。8月以降はタチウオを狙う漁船が多くなり、漁獲量は増加する。水温の低下が顕著になる11月以降は沿岸の操業エリアからタチウオが少なくなり、12月にはマンガに漁具を切り替えてクマエビやシラサエビを狙う漁船が増加するため、冬期、タチウオの漁獲量は急減する。漁獲集計システムの利用が可能な徳島市漁協と椿泊漁協について、2008～2012年で比較すると、徳島市漁協は4.0トン/年・隻、椿泊漁協は4.3トン/年・隻で、2漁協のCPUEはほぼ等しい。多獲期の8～10月を比較すると、この3カ月間に徳島市漁協では1.9トン/隻、椿泊漁協では1.8トン/隻で、それぞれ年間漁獲量の47%、41%を漁獲している。2漁協を合わせた2000～

2012年の平均漁獲量は181トン/年であった（図3-1, 3-2, 3-3）。

3. 資源動向に関するコメント

現在、低位・横ばい傾向にあるタチウオの資源状況は、何らかの資源管理の必要性があることを強く示唆している。しかし、管理方策の策定には次の課題があり、紀伊水道全体を対象とする計画の策定には至っていない。

同海域で本種を利用する和歌山県と連携して管理する

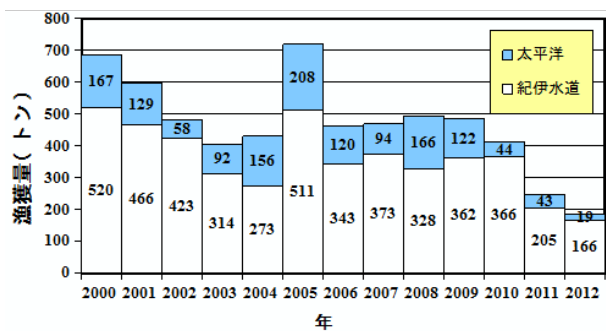


図 1-1. タチウオの海域別・年間漁獲量の推移（2000～2012年）。漁獲集計システムに登録されている全漁業種類（小底、延縄、小型定置網、大型定置網、釣り、旋網、刺網、すくい網、籠、採貝藻、カツオ一本釣り、その他）で漁獲された総計を示している。播磨灘でも1トン未満の漁獲はあったが、データは省略した。

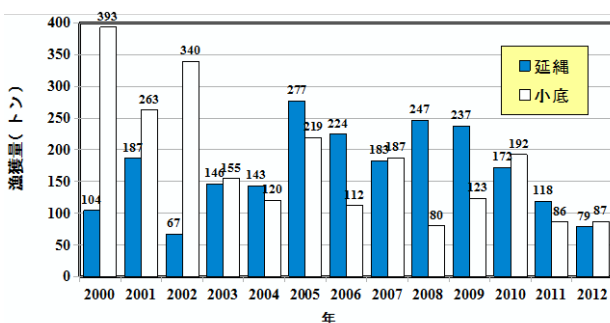


図 1-2. 紀伊水道に位置する徳島市漁協と椿泊漁協から抽出した小底と延縄によるタチウオの年間漁獲量の推移（2000～2012年）

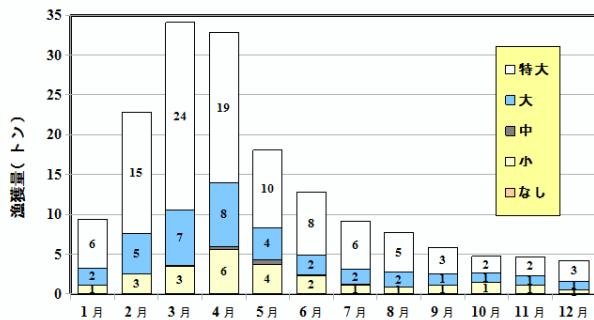


図 2-1. 椿泊漁協の延縄で漁獲されたタチウオの銘柄別漁獲量の経月変化（2000～2012年の平均値）

必要がある。

本種を漁獲する主要漁業種類の小底と延縄では漁獲サイズが大きく異なるため、両者に共通する実効性のある管理方策を見出しにくい。

これらの調整を図ることが難しく、解決も容易ではないことから、紀伊水道全域を対象とした管理方策の策定に備えて、必要となる資料を積み上げることが当面重要である。

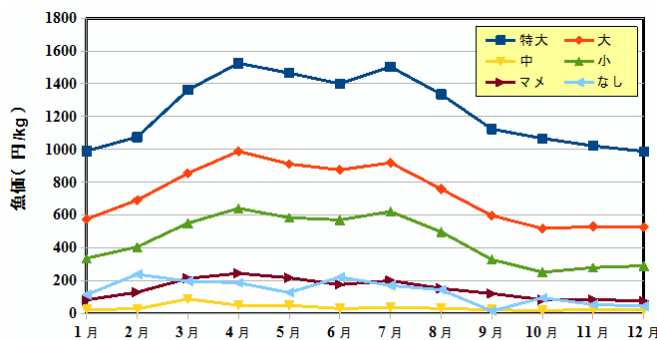


図 2-2. 椿泊漁協の延縄で漁獲されたタチウオの銘柄別魚価の経月変化（2000～2012年の平均値）

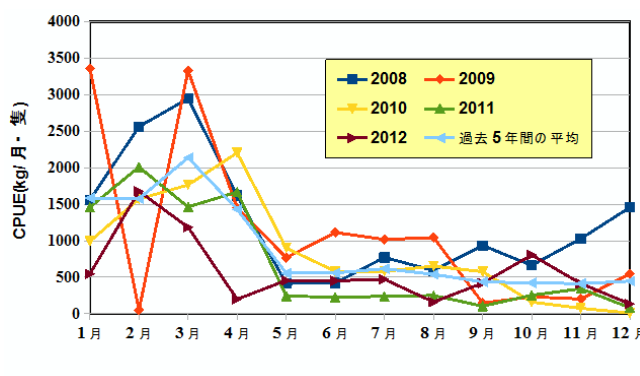


図 2-3. 椿泊漁協の延縄によるタチウオCPUE (kg/月・隻)の経月変化（2008～2012年）

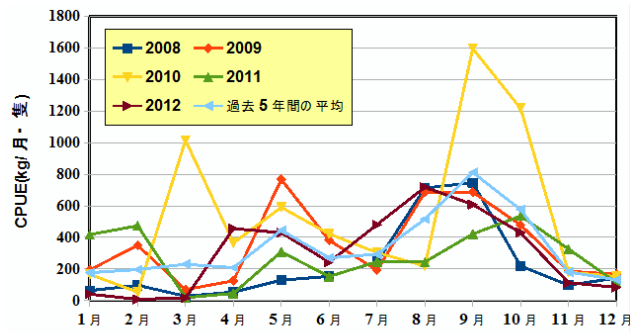
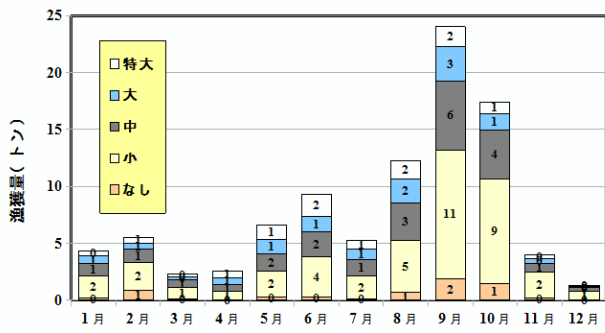


図 3-1. 上図は徳島市漁協, 下図は椿泊漁協の小底で漁獲されたタチウオの銘柄別漁獲量の経月変化(2000~2012年の平均値)

図 3-3. 上図は徳島市漁協, 下図は椿泊漁協の小底によるタチウオCPUE (kg/隻・日)の経月変化(2008~2012年)

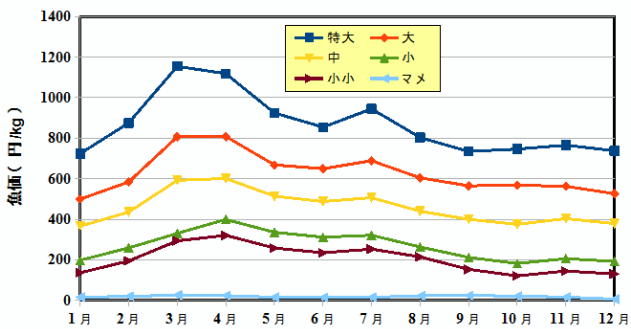


図3-2. 上図は徳島市漁協, 下図は椿泊漁協の小底で漁獲されたタチウオの銘柄別魚価の経月変化(2000~2012年の平均値)